

信 時 哲 郎

1 母

雪袴黒くうがちし うなるの子瓜食みくれば

風澄めるよもの山はに うづまくや秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん 齢弱としわかき母にしあれば

手すさびに紅き萱穂を つみつどへ野をよぎるなれ

大意

黒い雪袴を着て、うない髪の子が瓜を食べながらやってくる
澄んだ風の吹き抜ける四方の山の稜線に、秋の白雲がうずまいて

自分こそ瓜が食べたいのだからに、まだ年も若い母であるから

手遊びに赤いススキの穂を、摘み集めながら野を横切っているのだな

モチーフ

(1) 賢治詩の中でも最も愛唱されるものの一つ。描かれているのは、まだ年若い母が、我が子に瓜（スイカ？）を与え、自分は手すさびにススキの穂を集めるといふ姿である。昭和七年十一月に「女性岩手4」に掲載された作品だが、昭和七年の秋と言えは、前年の凶作を受けて、東北では欠食児童が二十万人だったという飢饉の年で

ある。「清らかな瑞々しい」「さわやかな」作品だとばかり読んではないまい。しかし、農村の抱える問題点のみを読むのではなく、「地方女性の為の」「実際行動の上」に一つの指標を与えようとする「公器になろうと創刊された「女性岩手」（創刊前のパンフレット「女性公論発行について皆様へお願い」の中の言葉。『新語彙辞典』による）に掲載された」とすると、本作からは向日的な側面を読み取るべきなのかと思ふ。

語注

雪袴 もんぺ。賢治は東北訛で「モツペ」とルビを振ることもあったが、ここでは音数の関係から「ゆきばかま」と読みたい。

うがちし 穴をあけるの意味もあるが、ここでは服や袴、履き物、手袋などを身に付けること。

うなるの子 「うなる」とは、子どもの髪をうなじのあたりで切りそろえて垂らした子どもの髪型のこと。ここでは「うなる髪の子」の意であろう。

瓜食みくれば 恩田逸夫（後掲）は、本作に山上憶良の「瓜食めば 子ども思ほゆ栗食めば まして思はゆ いづくより 来りしものを 眼交に もとな懸りて

安眠し寝さぬ」の歌が反映されているのではないかという。そして、その瓜について、マクワウリであろうと『新語彙辞典』や三神敬子（後掲）はいうが、島田

隆輔（後掲A）は「みずみずしい味瓜はこの初秋の光景と微妙にずれているのではなからうか」とし、「これは、漬けたしろり（つけうり）ではないのか」

「まだ浅い漬け瓜を、せめておやつにするしかすべのない凶作農村の母子像なの

だ」とする。ただ、瓜は夏の季語で、スイカは秋の季語であることから考えれば、この瓜は旬が遅いスイカだと解釈することもできると思う。

紅き萱穂 萱はイネ科の多年草で、ススキ等をさす。八月十月に花期を迎える。秋の季語。賢治は「春と修羅 第三集」の「七四〇 秋 一九二六、九、二三、」で「稔った稲や赤い萱穂の波のなか」と書いている。三谷弘美(後掲)は、「紅」から凶作や赤貧のイメージを、奥本淳恵(後掲)は、「少女のような母が内在させているエロス」を読み取ろうとしているが、本作における瓜がスイカだったとすれば、その赤色と対照させたとも考えられることでもきよう。

野をよぎるなれ 「なれ」は断定の助動詞。その已然形であるということから、意味を強めているのだと解したい。

評釈

黄罨(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その裏面に書かれた下書稿(二)(鉛筆で⑤)。これ以降の全てに「母」のタイトル)の二種が現存。「女性岩手4」(女性岩手社 昭和七年十一月)発表形は写真にて確認できるだけで所在がわからず、定稿も戦前に出版された文圃堂および十字屋版全集に掲載されているのが確認できるのみで、現存しないという。本稿では『新校本全集』にならない、『十字屋版全集』所収の本文を掲げた。スペースの空け方や句読点が実際のもものと違っていている可能性が高く、丸数字も付されていた可能性がある。

「女性岩手4」には、「母」というタイトルで、「二百篇」所収の「祭日」(『新校本全集』で「祭日(一)」とされている)、同じく「二百篇」所収の「保線工事」とともに掲載され、「母」という総題がつけられている。漢字等のルビや表記の他は、定稿とほぼ同じ。

「五十篇」の四十九番目に「女性岩手 創刊号」掲載の「民間薬」があり、「二百篇」の冒頭には「女性岩手4」に掲載された本作がある。三番目には創刊号に掲載された「選挙」、五番目と六番目には、「女性岩手4」に掲載された「祭日」「保線工事」というように、生前発表作品はここに集中している。意識的なのか無意識なのか判断が難しいが、定稿の成立過程を考える上で注意しておくべき点であろう。

「文語詩篇」ノート」の「22 1917」「八月」の項には、次のようにある。

瓜喰みくる子 日居城野 鳥
母はすゝきの穂をあつめたり 松林、

この部分には赤インクで×印がつけられていることから、一九一七(大正六)年の時点での詩想は文語詩化されたと考えられるが、おそらくそれが本作であろう。ちなみに一九一七(大正六)年八月、賢治は盛岡高等農林の三年生。八月二十八日から九月八日にかけて、同級生らと江刺郡地質調査に出掛けているが、日居城野は花巻郊外の地名(現在、運動公園のある花巻市松園町)であるから、実家に帰省している最中にも見た光景であろう。

下書稿(一)は次の通り。

幾重なる松の林を
鳥の群れはやく渡りて
風澄める四方の山はに
うづまくや秋の白雲

雪袴 黒くうがちし
その子には瓜を喰ましめ
みづからは紅きすゝきの
穂をあつめ野をよぎる母

本作は文語詩中屈指の名作として評価が高い。例えば吉本隆明(後掲A)は「清らかな瑞々しい抒情です 自分はこのやうな詩を尊しと思ひます」とし、恩田逸夫(後掲)は、「さわやかな初秋の広々としたススキ原で見かけた、さわやかな母子像に、賢治は好ましい視線を投げかけている」というように読んでいる。

取材されたのが大正六年であるとすれば、吉本や恩田のように素直に読み取るこ

とができよう。この年の岩手県はまれに見る大豊作で、『新校本全集16(下)補遺・資料 年譜篇』には、「米価また高騰し、農村はかつてない収入をあげた」とあるように、収穫を間近に控えた農村に暗い影は差していなかったと考えられるからである。もちろん大豊作だからと言って農村に問題が存在しなかったというわけではなく、『新語彙辞典』の年譜では、大正六年の項に、「この年、未曾有の豊作。米価高騰し農村の収入はかつてない盛況を呈し、一方経済界の変調により一般物価も高騰、中産以下の生活次第に行き詰まる」といった側面も考えられよう。しかし、いずれにせよ大正六年夏のこととして頭に浮かんだ時点では、ほほえましい光景として賢治が造形しようとした可能性が高い。

しかし近年では、岡井隆(後掲)のように、「一読すると、さわやかな詩で、よその母子の姿をスケッチしただけのようにみえるが、背後にはおそろく、やめる賢治には、もはやどうしようもない暗い現実が沈んでいる。賢治が思いやっているのは、やはり、「母」の飢えである」という解釈がなされるようになっており、三神敬子(後掲)は、「母になったとしてもまだ母性のよるこびを味わえる程に発達はしていないだろう。無理に負わされた「母」の名のもとで耐え忍び、遠く長い道のりを進まなければならない哀れさ」と読んでいる。

また、島田隆輔(後掲A)は、本作が大正六年のメモに発する作品であるとしても、本作が昭和七年頃(文語詩稿の制作を始めた昭和四年頃ではなく)になって初めて文語詩化された題材であったことを考慮に入れ、「記憶の源は豊作の年だったが、この詩の場には、凶作をもたらしたそのときどきの農村の記憶をもまた重ねられている可能性がある」とする。というのも、本作の発表年である昭和七年とは、『新校本全集16(下)補遺・資料 年譜篇』の昭和七年一月二十六日の項によれば、前年の凶作の影響を受け、「岩手県下小学校欠食児童二、五〇〇人に達す」とあり、七月二十八日の項には、「農漁村の欠食児童数は、二〇〇、〇〇〇人を突破と文部省発表。うち岩手県は三、五三九人という」ともあるからである。そう思えば、吉本や恩田のように、本作をただ「瑞々しい」「さわやかな」作品であると指摘するばかりでは済まないと思われる。

本作は多田保子主催の「女性岩手4」に掲載されたが、同時に掲載された「祭

日」(発表形)は、

谷権現たにえんのまつりとして
籠かごに白きのほりたち
むらがり続く丘おかに
鼓この音の数のしどろなる

穎花はな青じろき稲いねむしろ

水路の縁へりにたゞずみて

朝の曇りのこんにやくを

さくさくさくと切りにけり

というものであり、花巻市東和町にある谷権現(谷内権現とも言われた丹内山神社のこととされる)の礼大祭(旧暦八月一日・二日)を詠んだとされる作品だ。これも「母」と同じく、高い評価されているが、九月だというのに「穎花青じろき稲むしろ」とあるのは、やはりヤマセ(サムサノナツ)の年を描いているからだろう。

この「祭日」下書稿(一)には、「もつぺをうがち児を負ひて／青きバラソルかざしつ、／祭りに急ぐ農婦あり／はじめに店をうちのぞき／歪める梨と菓子とを見／次には切らるゝ、こんにやくを／や、ながしめにうちまもり／その故なにかわかねども／うらむがごときまなこして去る」とあったというが、「もつぺをうがち」とあるのは、文語詩「母」が「雪袴黒くうがちし」に始まっていたことと一致し、また、子どもを背負った母親が、縁日の梨や菓子、こんにやくをうらめしそうに覗くという件りも、やはり文語詩「母」とイメージが重なる。同時掲載ということから、重複を避けながらも、主題には一貫性があると考えてよいと思う。

もう一つの掲載作品である「保線工手」は、列車に乗っている保線工手が、窓外に鳥が雪を振り落ししながら飛ぶ姿を見て、「妻がけはひ」を感じるという作品である。

狸の毛皮を耳にはめ

シャブロの束に指組みて

うつろふ車窓の雪のさま

黄なる瞳に泛べたり

雪をおとして立つ鳥に

妻がけはひの著るければ

ほのかに笑まふその頬を

松は畳めり風のそら

島田(後掲B)は、「冬場の出稼ぎ農民の肖像であった可能性」を指摘しているが、これも農村の窮状を描いた作品の一つだと言えることができるかと思う。

このように、これら三作品には農村の窮状が背景にあったということで共通性が指摘できるが、それだけを前面に押し出しただけのものでないことについても、注意を喚起しておきたい。

まず「母」についてだが、奥本淳恵(後掲)が指摘するように、下書稿(一)では「齢弱き母」が「みづからは紅きす、き」を集めていたところが、下書稿(二)では「ひたすらに」、さらにその手入れでは「手すさびに」するようになっていく。つまり子どもに進んで瓜を与えて、「自らを犠牲にするけなげな母というステレオタイプのイメージを底に沈めようとする方向」に改稿されたのだとするが、たしかにそのような方向に改稿されてきたようにも思える。

「祭日」については、下書段階での状況が、あまりにも「母」と似すぎていたためもあるが、貧困や飢えを示す語句はばつさり省かれ、「頽花青じろき」に凶作を匂わせながらも、「さくさくさくと」小気味よくこんにやくを切る女性を描くことの方に重心が移っているように思える。また、「保線工手」については、「円満な夫婦関係というものの具体相」(伊藤眞一郎「保線工手」『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏ブライノ 平成十四年七月)を描いたものだという読み取りも提示されている。

こうして見ると、いずれも農村の窮状をスタートラインにしながら、そこから立ち上がるという傾向、向日的な傾向にスポットをあてていたとも言えるのではないだろうか。

当たり前の話だが、なにも賢治は平成の読者に向かって、昭和の東北の農村の貧困を訴えようとしたわけではない。「岩手女性」という誌名にも明らかのように、主な対象として考えたのは、「岩手」で生活をする昭和初年(同時代)の「女性」なのであって、今更、農村の疲弊などを指摘しなくても、彼女らは多かれ少なかれ東北の窮状の認識はできていたと思われる。賢治としては、その事実の向こう側にあること、つまり、岩手の現実的な苦難を乗り越え、次の時代に向かって生きていくにはどうすればよいかといった問題に関心があったとすべきではないかと思う。

「女性岩手」は、「煩雑困難な生活戦に苦しむ私達女性、地方女性の為めに、ハッキリした指針を示してくれる機関」(一印刷工「女性岩手」発刊を祝いで 多田さんのことども)「女性岩手 創刊号」女性岩手社 昭和七年八月)たらんとして創刊された雑誌で、賢治は、主催者であった多田保子に対して、当初の「女性公論」というタイトル案を「女性岩手」に変えるように進言したほか、創刊号に文語詩「民間薬」「選挙」を発表し、四、七、九(没後)号にも作品を発表している。多田は後年、「女性岩手に賢治先生から寄稿して頂いたのに稿料を差し上げていない。しかし先生は誌代を毎回きちんと納めて下さった」と、子どもたちに語っていたというが(斎藤駿一郎「多田ヤスの生涯と宮沢賢治・トシ」『宮沢賢治記念館通信 70』宮沢賢治記念館 平成十二年五月)、こうした同誌に対する賢治の関心や期待の大きさは、単に多田がトシと花巻高等女学校で同級であったからだという以上の強い思い入れや共感があったからだと思う。

創刊号に載った「巻頭言」(署名なし)は、次のようなものだ。多少長いがあまり知られていない文章だと思うので、全文を引用してみる。

創刊第一号を送る本誌の挙は、単に、せまい岩手女性の中に、問題の対象を限定しての企図ではありません

常に全女性の問題を問題として、始めて岩手の女性の問題が問題となり得ると

云ふ信念と、なし得ねばならぬと云ふ念願の下の企図であります。且つ

その見界の下に、勇躍して、此の任を果すべく覚悟を保持するものであります。従つて

『女性岩手』の探究問題は、全女性の問題の探究であり、一切の社会問題の探究であり、全生活の探究であることを以て理想とするものであります。而して

『女性岩手』は、私達の力の及ぶ地域的關係の中に真実に私達のものたらしめる意識のもとに発展せしめられん事を願ふものであります。

『女性岩手』事実¹に於いて、標題のそれよりも狭いかもありません。しかし、問題は常になし得る足下からであります。この足下よりの問題の探究に依り、伝統と因襲を時代と社会により止揚し、健全なる女性の道を歩み真の私達の『女性岩手』が哺育される事を信じるのであります。だから、せまさはせまさは差支へないであります。現実の貧弱さは、貧弱さとして、そのまゝ肯定して進むべきであります。すべての発展は、ありのまゝ、からのでなければならぬからであります。従つて

男性の声も聴きませう。経験者の深い経験も聴きませう。権威者の所見の開陳も願ひませう。直接女性そのもの、現実に関係なくとも、人間として必要なものである限り、あらゆる所論、研究の披瀝をも願ひませう。この着眼と計画の中に『女性岩手』の将来の発展のモーメントが存在するのであります。

諸氏の熱烈なる後援により、こゝに創刊第一号を世に送ることを、心から深く感謝すると共に、将来の成長に抵身を誓つて創刊の言葉の終りと致します。

同誌の目次を見ても、「若き近代女性に語る」「結婚に対する考察」「両性同権の意義」「我が史上に於ける女性文化と男性文化」「農村婦人と経済生活」といったタイトルが並んでおり、多田が地方に生きる見識の高い女性たちをターゲットにして、同誌を編集していたことがうかがえる。

第二号には、創刊号に賢治が掲載した文語詩に対する批評が載り、賢治はこれに気をよくして、文語詩の発表を続けることになったとされている。「花巻町 I子」の署名による批評は次のようなものだ。

宮沢賢治先生が多分病床からの御寄稿と思ひますが、「民間薬」「選挙」の二篇、まことに先生の長詩の大成を思はせるものがあります。はじめて発表された「春と修羅」時代には、私共いかにその一々を繰りかへしても、先生の作意と情緒とをつかむことが出来ないで、たゞその中の「無声慟哭」や「獅子踊」に琴線の響を感じ得たにすぎませんでした。その後十年、すっかり洗練され切つたこの二篇を口誦して見るとき、この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりき、取れる感じがいたします。一二誤植と思はれるふしも見えますが、若しあのまゝ、でいゝのなれば、また百回の吟誦をくりかへして見ませう。

この批評を受けて、文語詩を二回目に発表したのが、「女性岩手4」、つまり「母」の総題が冠された昭和七年の十一月であった。さすれば、賢治はたとえ「I子」ただ一人のためであつたとしても、おぎなりの作品でお茶を濁す気などはなかつたと思われる。

以上の点から、当時としてはもはや明白にすぎる岩手の農村の窮状について訴える作品など、賢治は書く必要がなかつたのではないかと思う。もちろん、当時の賢治が岩手の農村の悲惨さを軽んじていたなどと言つてもいい。賢治としては、地方に生きる女性たちを主題にして芸術と呼べる奥行きのある作品を、しかも、向日的な側面のある作品を示したかたのではないかと思うのである。

さすれば、文語詩「母」において、子どもが食べている瓜を、島田（後掲A）が言うように、飢えをしのぐために食べていた「漬けたしろうり」とまで解する必要があるかと思ふ。

そもそも賢治作品における「瓜」の用例は、『新校本全集 別巻 補遺・索引 索引篇』で調べてみるかぎり、「つけうり」を「瓜」として書いたことはなく、例えば「銀河鉄道の夜」（後期形）において、「子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの声」という用例、また、「風の又三郎」において、発破によって川魚が浮かんでいるのを、「嘉助が、まるで瓜をすするときのような声をだしました。それは六寸ぐらゐある鮎をとつて、顔をまっ赤にしてよるこんでゐたのです」という風

に、子どもたちにとってこれ以上にならない喜びの声を上げるシーンで用いられている。

だとすれば、まだ母としての自覚、大人としての自覚の薄い母親が、本当は自分の方が大きな声を出して飛びつきたいくらい瓜を、黙ってわが子に譲るというシーン、すなわち子どもが大人になり、女の子が女になる瞬間の記述として、賢治は書き留めたかったのではないかというように思えてくる。その背景には、もちろん瓜を好きだけ買うことのできない貧困の問題が横たわっていたのは事実であるとしても、大正六年の感動と昭和七年の文語詩制作の間に、あまり大きな違いはないと、賢治は思っていたのではないだろうか。むしろ、世に欠食児童が増えていた時期であったからこそ、新しい岩手の生活と文化を担う女性たちへの期待を込めて、賢治はこうした作品を書いたのだと考えたい。

先行研究

- 小原忠「『女性岩手』と賢治作品」(『賢治研究 8』宮沢賢治研究会 昭和四十六年八月)
- 儀府成一「社会主事 佐伯正氏 宮沢賢治の文語詩を繞って」(『啄木と賢治 12』みちのく芸術社 昭和五十六年十一月)
- 恩田逸夫「賢治の文語詩に現れた母性像」(『宮沢賢治論 2』東京書籍 昭和五十六年十月)
- 松田司郎「『近親相姦』の神話」(『宮沢賢治の童話論 深層の原風景』国土社 昭和六十一年五月)
- 続橋達雄「終章」(『賢治童話の展開』大日本図書 昭和六十二年四月)
- 青山和憲「文語詩稿に関する独善的妄言」(『宮沢賢治 9』洋々社 平成元年十一月)
- 岡井隆 A「文語詩の発見 吉本隆明の初期「宮沢賢治論」をめぐる」(『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月)
- 岡井隆 B「『文語詩稿』の意味」(『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月)
- 三谷弘美「蜜柑色の光景」(『賢治研究 63』宮沢賢治研究会 平成六年四月)

原子朗「ことば、きららかに」(『十代 17-12』ものがたり文化の会 平成九年十二月)

栗原敦 A「Q & A 定稿用紙の失われた「文語詩稿 一百篇」作品」(『宮沢賢治研究 Annual 8』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)

赤田秀子「文語詩 語注と解説」(『林洋子ひとり語り 宮沢賢治』クラムボンの会 平成十二年二月)

三神敬子「母」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラノ 平成十二年九月)

杉浦静「テキスト・クローズアップ② 賢治晩年の文語詩」(『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 26 スズラン』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十五年三月)

島田隆輔 A「再編論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)

栗原敦 B「回顧から再構成へ「文語詩稿」①」(『NHKカルチャーアワー 文学探訪 宮沢賢治』日本放送出版協会 平成十七年十月)

奥本淳恵「宮沢賢治文語詩稿〈双四聯〉の表現手法 詩篇「母」の場合」(『論攷宮沢賢治 7』中四国宮沢賢治研究会 平成十八年七月)

吉本隆明 A「孤独と風童」(『初期ノート』光文社文庫 平成十八年七月)

吉本隆明 B「再び宮沢賢治氏の系譜について」(『初期ノート』光文社文庫 平成十八年七月)

沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」(『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティ 平成二十二年四月)

島田隆輔 B「再編稿の展開」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク』(写稿)による過程」(『未刊行』平成二十二年六月)

松沢和宏・十川信介・十重田裕一・栗原敦・井上隆文(司会)『座談会』草稿の時代」(『文学 11-5』岩波書店 平成二十二年九月)

2 岩手公園

①「あなた」と老いしタッピングは、
東はるかに散乱の、
杖をはるかにゆびさせど、
さびしき銀は声もなし。

②なみなす丘はぼうぼうと、
大学生のタッピングは、
青きりんごの色に暮れ、
口笛軽く吹きにけり。

③老いたるミセスタッピング、
中学生の一組に、
「去年こぞなが姉はこゝにして、
花の言葉を教へしか。」

④弧光燈アークライトにめくるめき、
川と銀行木のみどり、
羽虫の群のあつまりつ、
まちはしづかにたそがる、。

大意

「あそこだ」と老齡のタッピング先生は、杖ではるか彼方を指し示すが、
東空には銀の雲が散乱するばかりで、それに応じる声は聞こゝえない。

夕暮れ時の丘はなみなす草が、青リンゴの色になって暮れ、
大学生のワイラード・タッピングは、軽く口笛を吹いた。

老いたミセス・タッピングは、「去年、あなたの姉さんは、ちようどこの場所で、
盛岡中学のクラスを相手に、花言葉を英語で教えていたんですけどね」。

アークライトの周りには、たくさんの羽虫が群れをなして飛び交っており、
中津川とその向こうには岩手銀行の赤煉瓦、そして木々の緑色が映え、街も静かに
黄昏時を迎えるところである。

モチーフ

盛岡城跡に詩碑が建てられていることもあって、人口に膾炙される作品の一つ。文
化的にも経済的にも優位にあったアメリカからキリスト教伝道のために日本を訪
れ、東北の僻地に過ごすアメリカ人家族を、賢治は信じる宗教の違いを超えて、敬
意をもって眺めていたのだろう。ただ、タッピング一家は下書稿(三)の初期段階では
登場しておらず、下書稿(三)に(四)を付した後になって初めて現れている。賢治の文語
詩は、岩手に生きる様々な人を登場させようとしており、いわば岩手万葉集を一人
で編もうとする試みであったようにも思えるのだが、定稿を書こうとした段階で、
ふと文語詩に西洋人を登場させるアイデアを思いついたのかもしれない。

語注

岩手公園 北上川東岸と中津川西岸の合流地点に南部氏二十万石の居城・盛岡城が
あったが、明治三十九年にはその跡地が公園として市民に開放されることとなっ
た。平成十八年には愛称が盛岡城跡公園もりおかじょうあとに改められた。なお、本作の詩碑が同
公園の中津川沿いにある。

老いしタッピング 盛岡浸礼教会の宣教師であったヘンリー・タッピング (Henry
Topping) のこと。一八五七年(安政四年)。ただし墓誌には一八五三年とあると
いう。「歴史が眠る多磨霊園」http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/tyopping_h.html にアメリカのウイスコンシン州で生まれ、一八八八(明治二十
一)年にジュネヴィーヴ・ファヴィルと結婚。ロチェスター神学校やモーガン・
パーク神学校で学んだ後、ベネディクト大学で教鞭を執る。明治二十八年に宣教
師の任命を受けて夫婦で来日し、東京中院(後の関東学院)で教鞭を執る。明
治四十年からは盛岡に移って、賢治の通った盛岡中学校で教鞭を執った(明治三
十九年四月～四十二年九月)。明治四十二年四月に入学した賢治に六ヶ月ほど接
した可能性がある。盛岡高等農林学校で賢治と同じ農学科二部で学んだ出村要三
郎(「賢治とキリスト教」『2011人の証言 啄木・賢治・光太郎』読売新聞盛岡
支局 昭和五十一年六月)は、「二年の二期期だったか、宮沢君に誘われて、盛
岡教会のタッピング牧師がやっていたバイブル講義を聴きに行った。週一回の講義

だったが、彼は英語もうまく、英語と日本語半々で話すタッピング師によくほめられていた。英語のマスターとキリスト教への関心が、彼の目的だったように思う」としている。生年については二説あるが、本作が関連作品の取材年月どおり大正七年のできごとに基づいているとすれば、タッピングはすでに六十代で、「老いし」の文字もふさわしい。大正八年には盛岡を去って帰国。大正十一年には再び日本に戻り、横浜・東京で英語教育と伝道に努めた。日米開戦後も夫婦で日本に留まり、昭和十七年に没した。「歌稿〔B〕」には、「280^d281」プジェー師や／さては浸礼教会の／タッピング氏に／絵など送らん」ともあるが、上田哲（後掲）は、「賢治のキリスト教についての知識のうちタッピングとの接触によって得られたものがかなり多かったであろう事は、推測に難くない」としながらも、「タッピングの回想や当時の信者たちの想い出、教会の記録の中に賢治の名が出てこない」ことを指摘している。

さびしき銀 関連作品とされる「歌稿〔B〕」に「銀雲」が出てくることから、銀色の雲のこととも思われるが、空中に散乱する光を「銀のモナド」（『春と修羅（第一集）』の「青森挽歌」や「詩ノート」の「一〇五八（銀のモナドのちらばる虚空）」一九二七、五、九、「五十篇」の「砲兵観測隊」などに登場）として表現することが多かったので、ここでもそちらの意味で捉えたい。本作は黄昏時、つまり夕刻の盛岡の街を舞台にしているので、西空には夕焼が見えていたのだろうが、東空には反薄明光線（太陽と反対側に光線が放射状に集まっているようにみえる現象）が見えた可能性があり、それを指すのかもしれない。中村稔（後掲）は「北上山地をさすものであろう」とする。

大学生のタッピング タッピング家の長男・ウィラード (Willard) のこと。明治三十二年（賢治よりも三歳年下）に日本で生まれた。女優で賢治作品の朗読でも知られる長岡輝子（後掲B）によれば、「この詩の頃のウキラードさんは夏休みになると両親の住む盛岡に帰省され、私達園児にナステーション（キンレンカ・信時注）の実を摘んでポリポリ食べてみせて驚かしたりするいたずらっ子でした」とある。小林功芳（後掲）によれば、ウィラードはその後、瀬戸内海の伝道船・福音丸の船長の娘と結婚して渡米。昭和六年に来日して、関東学院でも教鞭を執

ったという。昭和三十四年にアメリカにて病没。

ミセスタッピング タッピングの妻であったジュネヴィーヴ・タッピング (Genevieve) のこと。一八六三（文久三）年にウイスコンシン州に生まれ、幼稚園教師になるための教育を受け、また、ドイツで音楽も学んだ。一八八八（明治二十一年）年にヘンリーと結婚して、共に神学校で学び、一八八九（明治二十二年）に長女ヘレンを出産。明治二十八年に日本に来ると、伝道活動を行い、築地と四谷に幼稚園を開園して人気を呼ぶ。明治三十二年に長男・ウィラードが誕生し、明治四十年には盛岡に転居。長岡輝子（後掲A）によれば、長岡の母・栄子は、県立盛岡高等女学校の雨天体操場を借りて保育所を作っていたところ、違反として閉鎖を命じられたが、タッピング夫人がこれを引き受け、自宅を開放して盛岡幼稚園を設立・運営したのだという（明治四十二年三月に岩手県知事より創立認可）。小林功芳（後掲）によれば、夫人は「私たちの幼稚園はこの地方で唯一のもので、次の学期の入園希望者数が私たちの人気が続いていることを示します。遠方の名家では息子を通園させるために母親が近所に下宿しています。数日前には、師範学校の卒業生34人が先生に連れられて、1日中、見学しました」と明治四十四年三月の書簡に書いているという。戦争中も日本に留まり、対米宣伝放送に出演したという指摘もある。昭和三十三年に東京で没した。

なが姉 タッピング家の長女・ヘレン (Helen) のこと。一八八九（明治二十二年）賢治より七歳年長）年にアメリカで生まれるが、両親と共に六歳で来日。高等教育をアメリカで受け、修士号を取得すると、伝道員として盛岡・仙台に派遣された。小林功芳（後掲）によれば、ヘレンも盛岡中学で英語を教えており、中学の方から正規の教員になって欲しいという依頼があったことを父のヘンリーが書簡に書いているという。長岡輝子の父・長岡拡は、明治三十九年六月から四十一年十月まで盛岡中学校で英語教員を務め、名教科書と言われる「Crown Readers」の著者としても知られるが（小山卓也「クラウン・リーダーと長岡拡」『英学史研究17』日本英学史学会 昭和五十九年十月）、卒業生で東京大学名誉教授となつた小野清一郎は思い出の教師の筆頭に長岡をあげ、その英語力と人格の立派さについて語っている（「良き師そして良き友 座談会・明治期の思い出」『白聖校

九十年史』盛岡一高創立90周年記念事業推進委員会 昭和四十五年十月)。長岡 拓が賢治に直接教える機会はなかったが、長岡輝子(後掲B)には、「私の父長岡 拓の教え子で後に法曹会の重鎮になった小野清一郎さんや同級生だった長岡保太郎さんから、父の英語教育法は独特で英語の会話のためにタッピングさんのお嬢さんのヘレンさんを招いて学生達と岩手公園に散歩に行きその間絶対に日本語を使わせないという事を聞き、賢治の詩のあの一節の裏には私の父も関係していた事を父の死後何十年目か知らされた事に不思議な感動を覚えました」とある。また、盛岡中学でヘレンが父の代講に来た時のことを北田耕夫(父は盛岡市長だった北田親氏)は、「若くて美しい方」であったため「教室に来て、いざ授業をはじめようとすると、生徒たちは「ビューテフル ビューテフル」というと、もう娘さんは、顔を真っ赤にして授業にならな」かったのだと語っている(「内丸・仁王・本町付近」『もりおか物語九 内丸・大通かいわい』熊谷印刷出版部 昭和五十四年二月)。賢治とヘレンが会った証拠や年月の特定はできないが、長岡輝子(後掲B)によれば、賢治研究者である「菊池暁輝はよく私に、賢治の童話「マリヴロンと少女」のモデルは、花言葉を中学生に教えていたあのヘレンさんだといっていました」ともいう(タッピング夫人の経営による幼稚園で、菊池の兄と長岡の兄が同級、また、菊池は長岡の姉と同級。菊池の妹と長岡本人が同級だった)。結核の療養のため大正二年にアメリカに渡るが、大正七年には神戸のYWCA運営のために再来日。香川豊彦の秘書・通訳を務め、それを契機に家族ぐるみで香川を支えたという。生涯を独身で過ごし、昭和五十六年にアメリカで没した。

弧光燈^{アーカイブ} 低電圧・大電流によって電極間の気体と電極が高温となり、強い光を発すること(アーク放電)を利用した電灯のこと。効率の悪さから、現在は用いられないが、「明治十五年一月一日銀座大倉組店前に点火して、其光景を見たりしが、大に衆目を驚かし、毎夜見物人諸方より集り来りて、其奇巧を嘆賞せり」(『明治事物起源』)というように、アーク灯は電気象徴、近代文明の象徴として広く喧伝された。大正六年四月、賢治が盛岡高等農林三年の時に、弟・清六といとこ達の盛岡中学入学が決まるが、賢治はその監督を兼ねて、中津川の下橋のそば

にあった玉井家に下宿する。その直前に清六に送った手紙には次のような一節があったという(宮沢清六「最初の手紙」『兄のトランク』平成三年十二月 ちくま文庫)。「若しも君が、夕方岩手公園のグラントの上の、高い石垣の上に立つて、アークライトの光の下で、青く暮れて行く山々や、河藻でかざられた中津川の方をながめたなら、ほんたうの盛岡の美しい早春がわかるだらう」。賢治は盛岡の最も美しい場所を本作に書いたことになる。

川と銀行 中津川と、それにかかる中ノ橋際に建つ赤い煉瓦造りの盛岡銀行本店のこと。東京駅の設計などで知られる辰野金吾と岩手出身の葛西万司の設計。明治四十四年四月に三年がかりで完成。現在も盛岡のランドマークとなっており、国の重要文化財。平成二十四年八月まで岩手銀行中ノ橋支店として使われた。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(鉛筆で①)、その裏面下半分に書かれた下書稿(二)、黄野(220行) 詩稿用紙に毛筆と藍インクで書かれた習字稿(断片)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(三)(『新校本全集』に指摘はないが、島田隆輔の指示によれば、原稿コピーには「岩手公園」とタイトルが付され、賢治の書き癖も認められるという。手入れの最中に鉛筆で⑤)の四種が現存。定稿は現存しないが、『十字屋版宮沢賢治全集』の口絵写真に二色刷で掲載されており、『新校本全集』ではこれを元にして本文を採用しており、本稿もそれにならう。生前発表なし。

『新校本全集』では、「歌稿〔B〕」の652〜655⁴656⁴(「大正七年五月より」に「公園」としてまとめられている)を関連作品としてあげているが、656も付け加えて左に掲げる。

- 652 青黝み 流る、雲の淵に立ちて／ぶなの木／薄明の六月に入る。
- 653 暮れざるに／けはしき雲のしたに立ちて／いらだち燃ゆる／アーク燈あり
- 653 654⁴ ニッケルの雲のましたにいらだちて／しらしら燃ゆる／アーク燈あり
- 654 黒みねを／はげしき雲の往くときは／こゝろ／はやくもみねを越えつつ。

655 燃えそめし／アークライトの下に来て／黒雲翔ける夏山を見る

655^a 燃えそめし／アークライトは／黒雲の／高洞山を／むかひ立ちたり

656 黒みねを／わが飛び行けば銀雲の／ひかりけはしくながれ寄るかな。

大正七年の五月といえ、賢治は盛岡高等農林学校を卒業し、父と将来の仕事や、徴兵、宗教といった様々な問題で諍いながらも、結局は研究生として残ることとなった時代である。

下書稿(一)の初期形態から見ていこう。

アークライト
弧光燈に灯は下りて

しらしらと苛立てど

南はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

白堊いろなる物産館は

つ、ましく黄にかゞやきてあり

起伏の丘はゆるやかに

青きりんごの色に暮れ

高洞山の焼け痕は

蓴菜にこそ似たりけり

小学校の窓ガラス

窓きれきれに薄明の

黄ばらを浮べて夜に入り行く

タッピング家は全くここには登場しない。つまり、この段階で賢治が描こうとしたのは、夕暮れ時の盛岡の街であったのだと思う。城跡から街を眺め、アークライ

トの光が灯り始めたとき、中津川畔にあった物産館の建物や小学校(仁王小学校?)が美しく見えたのだろう。賢治はことに昼間の光から夜の光に入れ替わる黄昏時(トワイライト)の盛岡を愛したようで、清六に向けて「若しも君が、夕方若手公園のグラウンドの上の、高い石垣の上立つて、アークライトの光の下で、青く暮れて行く山々や、河藻がかざられた中津川の方をながめたなら、ほんたうの盛岡の美しい早春がわかるだらう」(「最初の手紙」『兄のトランク』ちくま文庫 平成三年十二月)と書いたというが、そんな自然と近代文明が融合した盛岡の街の美しさを描きたかったのだと思う。

しかし、下書稿(一)の手入れでは、光と街だけでは深みが足りないと思ったのか、「まひるを青き瓦斯の火や／酸のけぶりに胸いたみ」と、実験室での様子、また、こうした薬品のせいで胸を患ったという大正七年頃に賢治が抱えていた問題が重ねられるようになっていく。また、「きみをおもふ日のつりしか」、「誰にもあらぬひとを恋ひ／こゝろせわしきいちにちの／ブンゼン燈をはなるれば」などの詩句も、この段階で書き込まれるようになっていく。

高等農林学校時代の賢治の恋愛についてはほとんど知られていないが、「文語詩篇」ノート」の末尾に「農林第二年第一学期」として、「Zweite Liebe／果樹園」(「Zweite Liebe」とはドイツ語で「第二の恋」と書き記されており、また、同じノートの「1916」四月「高農二年」の項にも、「そのひとのきみにのみ話しかくるは／かくまでもきみのうるはしきにや。／砲台、波の明滅」という書き入れもある。文語詩に虚構はつきものだが、このノートにまで虚構を書き付けたとは考えにくいので、賢治はこの頃、「Zweite Liebe」にあたるものを経験し、その時の思いを大正七年の時に見た若手公園からの風景に重ねようとした可能性もあると思う。

高等農林の二年と言え、同性愛的に語られることもある保阪嘉内が入学して、賢治と寮で同室になっているから、もしかしたらそれを言うのかもしれない。賢治に同性愛的な傾向があったのかと訝る人もあるかもしれないが、例えば江戸川乱歩は、「乱歩打明け話」(「大衆文芸」報知新聞社出版部 大正十五年九月)で、「つまりよくある同性愛のまねごとなんです。それが実にプラトニックで、熱烈で、僕の一生の恋が、その同性に対してみんな使いつくされてしまったかの観があるので

す」と書いているが、そのように「よくある」ものであった。森鷗外の「キタ・セクスアリス」（「すばる」昂発行所 明治四十二年七月）にも、「学校には寄宿舎がある。授業が済んでから、寄つて見た。ここで始めて男色といふことを聞いた」とあつて、主人公が上級生に襲われるシーンを描いているし、夏目漱石も『こゝろ』（岩波書店 大正三年九月）で、「先生」は大学生である「私」に向つて、「恋に上る階段なんです。異性と抱き合ふ順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」と言わせており、ことさらに騒ぎ立てるほどの〈異常〉な心理ではない。

ところで、「Zweite Liebe」に併記される「砲台、波の明滅」というのはなんだろう。「一学期」に内陸部の盛岡で、砲台や波の明滅を見る可能性はまずない。年譜を紐解いてみても、「一学期」にはこれにあたるようなヒントを見つけない。年譜をきかない。ただ、大正五年三月十九日から三十一日まで、賢治は仲間たちと共に修学旅行に行つており、関西一円を回つた後、鳥羽から蒲郡まで船に乗っている。鳥羽は良港であつたため、幕末には鳥羽藩によつていくつかの砲台が作られたというので、賢治が船上からこれを見た可能性は十分にある。ところがこれは保阪の入学する前のできごとなので、もし賢治の「第二の恋」が同性に対する思いのことであつたとしても、それは保阪ではなく、一緒に修学旅行に行った同学年の友人であつたということになる。そうすれば修学旅行の際のつらい嫉妬の経験と、それに耐える高農二年の一学期の日々を、賢治が詩化しようとしたと考えば辻褄が合うことになる。

少年小説「銀河鉄道の夜」に、「カムパネルラだつてあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ」というシーンがあるが、修学旅行の船上で似たようなことがあり、それが「そのひとのきみにのみ話しかくるは／かくまでもきみのうるはしきにや」と書かせたのではないかといつた風に想像を働かせることもできそうだ。

しかし下書稿(二)は、恋愛の方向で推敲されることはなかった。

弧光燈は燃えそめて

羽虫もはやく群れたれど

東はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

なみなす丘のつらなりは

青きりんごのいろに暮れ

ひとりそばだつ高洞山に

山火の痕ぞかぐるなる

まひるは青き瓦斯の火や

酸のけぶりに胸いたみ

ゆふべはこゝに商量の

むなしき日数つもりしか

アークライトにめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかにたそがる、

だいぶ定稿に近づくが、まだタッピング一家も現れず、起承転結の「転」にあたる部分に、研究の結果として胸を患い、公園にてむなく商量（いろいろと考え推し量ること）したという部分が書き加えられるのみである。

続く下書稿(三)では、転にあたる第三連が「まひるを経来し分析の／酸のけぶりに胸いたみ／わがしわぶけばあやしみて／ふりさけ見往く園つかさ」と、胸を患っていることがよくわかるように書き直される。が、次の手入れでは一・三連が削除されて、二・四連のみの二連構成となり、島田隆輔（後掲C）が言うように、「夕暮れのなかに青ざめて沈んでいく農山村」と「近代の灯しにみちびかれて美しく暮れゆく街」が対比されて描かれることになる。しかし、すぐに四連構成のプランが再浮上し、ここでタッピング家の面々が登場し、定稿になっていくわけである。

島田(後掲C)は、この一連の改稿について「(自伝性)」をその詩層のなかに沈めることで、詩層は「共同性」・「社会性」の視座に立ち、農山村と都市という風景の対置を果たした。そのうえで、異邦人を舞台にあげて岩手公園の近代性を強調して、飢饉の風土を「かなた」へと追いやるのである」とする。一方、沢口たまま(後掲)は、「(自伝性)」の方を重んじ、「そのひとのきみにのみ話しかくるは／かくまでもきみのうるはしきにや」という「文語詩篇」ノートのメモについて、「そのひと」は、私の推理が正しければヘレンでしょう。賢治は、そのひとが「きみ」にばかり話しかけるので、気が気ではありません。「年上の外国人宣教師、ヘレン・そして後輩だというのに、自分よりもずっとキリスト教にも詳しく、ヘレンとスマートに会話を交わす保阪」と、ヘレン・保阪を交えた三角関係が作品の背景にあったのではないかとしている。

賢治と関わりがあった実在の人物を、文語詩においてもそのままの名前で呼んでいる例は少ないことから、島田の言うように「(自伝性)」を完全に詩層の中に沈め込んでしまおうとしたのだとは思えない。かといって、沢口のようにどこまでも文語詩に自伝性を追い求め、想像力をたくましくし過ぎるのも問題であろう。本論では、そのちょうど間くらいの視点、すなわち、賢治は岩手で出会った様々な人々(自分を含めて)を、時には虚構を大胆に交えながら文語詩に描いたのだという立場から読んでみたいと思う。つまり、推敲もだいたい進んだ或る時、格好の題材としてタッピング一家のことが頭に浮かび、それを基にして定稿を書き付けたのではないかと考えたい。かつて「道の奥」とも「不來方」とも呼ばれた地に伝道のために訪れ、贅沢をするでもなく、自分の子どもたちには日本語を学ばせ、生涯を伝道に捧げたアメリカ人一家を、賢治は敬意をもって描こうとしたのではないだろうか。

「一百篇」では、「五十篇」と違って、この他にも何人かの西洋人が登場している。今はまだ「五十篇」と「一百篇」の編集意識の違いについて明確に答えることはできないが、今後は、こうした点に気をつけながら読んでいくこととしたい。

先行研究

長岡輝子A「タッピングさん」(『賢治研究7』宮沢賢治研究会 昭和四十六年四月)

小沢俊郎「文語詩「岩手公園」稿」(『賢治研究14』宮沢賢治研究会 昭和四十八年八月)

中村稔「鑑賞」(『日本の詩歌18 新訂版 宮沢賢治』中央公論社 昭和五十四年九月)

吉本隆明・原子朗「賢治の言語をめぐって」(『国文学 解釈と教材の研究29-1』学燈社 昭和五十九年一月)

上田哲「賢治とキリスト教」(『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院 昭和六十年一月)

長岡輝子B「わたしの賢治」(『彷彿月刊』弘隆堂 昭和六十二年七月)

長岡輝子C「さようなら、ヘレンさん」(『ふたりの夫からの贈りもの』草思社 昭和六十三年四月)

小林功芳「タッピングの家の人々」(『英学史研究21』日本英学史学会 昭和六十三年十月)

島田隆輔A「文語詩稿」構想試論『五十篇』と『二百篇』の差異」(『国語教育論叢4』島根大学教育学部国文学会 平成六年二月)

三谷弘美「賢治文語詩における深層と表層」(『賢治研究64』宮沢賢治研究会 平成六年九月)

萬田務「宮沢賢治の詩の世界」(『宮沢賢治自然のシグナル』翰林書房 平成六年十一月)

天沢退二郎「宮沢賢治の「恋」・「こひびと」の謎」(『宮沢賢治』注』筑摩書房 平成九年七月)

原子朗「ことば、きららかに」(『十代17-12』ものがたり文化の会 平成九年十二月)

栗原敦「Q&A 定稿用紙の失われた「文語詩稿 一百篇」作品」(『宮沢賢治研究 Annual 8』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)

須田浅一郎「文語詩「岩手公園」の生い立ち」(『宮沢賢治に酔う幸福』日本図書刊行会 平成十年三月)

吉田敬二「岩手公園」(『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラノ 平成十一年六月)

- 宮沢健太郎「『文語詩稿 一百篇』」(『国文学 解釈と鑑賞65—2』)至文堂 平成十二年二月)
- 浜下昌宏「賢治と女性(1) ミス・タッピングのこと」(『妹の力とその変容 女性学の試み』近代文芸社 平成十四年三月)
- 杉浦静「テキスト・クローズアップ② 賢治晩年の文語詩」(宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報26 スズラン)宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十五年三月)
- 黒澤勉「賢治作品に見る盛岡」(宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報28 サクラソウ)宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十六年三月)
- 島田隆輔B「〈写稿〉論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)
- 吉本隆明A「詩学叙説 七・五調の喪失と日本近代詩の百年」(『詩学叙説』思潮社 平成十八年一月)
- 吉本隆明B「孤独と風童」(『初期ノート』光文社文庫 平成十八年七月)
- 吉本隆明C「再び宮沢賢治氏の系譜について」(『初期ノート』光文社文庫 平成十八年七月)
- 無署名「解説」(『宮沢賢治記念館通信96』宮沢賢治記念館 平成十九年十二月)
- 沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」(『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティイー 平成二十二年四月)
- 島田隆輔C「定稿化の過程」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク〈写稿〉による過程』(未刊行) 平成二十二年六月)
- 小林俊子「詩歌」(『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月十日)
- 石塞太「ふるさと賛歌「きれいにすきとほつた風をたべ」」(『宮沢賢治 折りのことば 悲しみから這い上がる希望の力』実業之日本社 平成二十三年十一月)
- 島田隆輔D「宮沢賢治 文語詩稿「岩手公園」の生成過程 自伝詩篇から社会詩篇へ」(『国語教育論叢21』鳥根大学教育学部国文学会 平成二十四年三月)

3 選挙

(もつて二十を贏^かち得んや)

はじめの驚^う馬^まをやらふもの

(さらに五票もかたからず)

雪うち囀^なめる次の騎者

(いかにやさらば太兵衛^ま一族)

その馬弱くまだらなる

(いなうべがはじうべがはじ)

懼^{おそ}る、声はそらにあり

大意

(これで二十票は得られるはずだ)

はじめののろい馬を走らせる者

(さらに五票も確実^まだろう)

雪を囓^かんでいるのは次の騎手

(それでは太兵衛の一族はどうだろう)

それは弱々しいマダラの馬

(いや、ちがうちがう)

怖^{おそ}れる声が空に響く

モチーフ

賢治の父・政次郎は町会議員を四期務めたが、おそらくは選挙の票読みの際のドタバタを元にして、選挙を競馬とアレゴリカルに描いた作品。大正十五年には花巻にも花牧競馬場が開設されたが、そんなことも賢治の頭にはあったのだろう。政次郎は昭和四年四月の選挙で落選し、まだその記憶も新しい昭和七年八月に、本作は「女性岩手 創刊号」に掲載されている。賢治は実名でこの作品を発表したが、賢治や政次郎を直接知る人たちはどんな反応をしたのだろうか。また、賢治の父に対する思い、同時代の読者に対する思いはどのようなものであったのだろうか。興味

は尽きない。

語注

驚馬^{うま} 歩みのおそい馬、転じて才のない人物のこと。普通は「どば」と読む。

太兵衛一族^{まき} 岩手では一族のことを「まき」と呼ぶ。宮沢家も「宮沢マキ」と呼ばれていたという。

うべがはじ 正しくは「うべなはじ」。「了解できない」の意味。『新語彙辞典』には「正しくは「うべなは(わ)じ」と言うところを、同じ意味の「うけがは(わ)じ」と言う語もあるので、賢治は両方を混用して「うべがは(わ)じ」と書いたと思われる。文語詩「かくてぞわがおもて」にも「われまたこれをうべがへば」とある。こちらは肯定」とある。

評釈

黄罫(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)のみ現存(タイトルは「選挙」。これ以降も同じ。青インクで写)。原稿は確認できないが「女性岩手 創刊号」(女性岩手社 昭和七年八月) 発表形。また、昭和二十三年頃までは定稿の存在が確認されていた。『新校本全集』には「十字屋版宮沢賢治全集」掲載の本文が採用されている。ただし、『新校本全集』によれば、「他の詩から考えると、句読点もあつたと思われる」とのこと。

「女性岩手 創刊号」に、「五十篇」の「民間薬」とともに掲載されている。漢字の表記等の他、定稿の「いかにやさらば太兵衛一族」が「(太兵衛の一族はいかならん)」となっている点を除けば、内容は定稿とほぼ同じ。

「文語詩篇」ノート」の「34 1929」の項に、「父撰拳落選」とあり、赤インクで×印が付されている。『新校本全集』には「文語詩作成済みの意味でつけたもののように思われる」とあるが、おそらくそのとおりであろう。

賢治の父・宮沢政次郎は成功した商人であり、浄土真宗の熱心な信徒であったことは知られるが、町会議員を四期務めてもいる。昭和四年四月に花巻町と花巻川口町が合併し、最初の選挙が行われるが、前回(大正十四年)の選挙ではトップ当選

を果たしていた政次郎は投票総数二四七三票のうち、六十票しか獲得できずに落選した。この後、選挙に立候補することはなかったという。

岡井隆(後掲)は「二十」とか「五票」とかいうのは、おそらく血縁地縁をもとに政党の利害がからむ、票よみの話として、かなり現実味をもった」のではないかといい、森三紗(後掲)は政次郎の票数は、当選者との差がわずかに四票でしかないことから、「五票もかたからず」といったセリフにも、リアリティが感じられる」という。

また、栗原敦・杉浦静「阿部晁「家政日記」による宮沢賢治周辺資料」(『宮沢賢治研究 Annual 15』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十七年三月)には、大正十三年から昭和九年まで湯口村村長を務め、宮沢家とも交流の深かった阿部晁の日記の一部が公開されているが、昭和四年四月二十八日の記事として「宮政ノ落選ハ院長ノ一五二欺カレタメ」とある。花巻病院院長で、政次郎・賢治とも交友のあった佐藤隆房の票読みが当たらなかったということだろうか。もしかしたら本作は、政次郎、賢治、阿部、佐藤らが票読みをしていた現場を取材した生々しい詩だったのかもしれない。

佐藤隆房(町会議員)『宮沢賢治 素顔のわが友』桜地人館 平成八年三月)によれば、大正十四年の春、花巻農学校の同僚(武道)で同級生だった照井謙次郎に、賢治は次のように語ったという。

「家の父親は、あれでなかなか悟ったようなことを言っているが大変なものですよ。いくら私が止めても町会議員に出ると言ってきたかないでやっているのだが、ああいうことにどのくらい魅力があるもんだか分からないなあ。おれは不幸者で、お父さん、うんとやりなさいというような応援はとも出来ないなあ。あんなことをやって、町会議員になってどういうことになるんだろう。」

と、お父さんに同化出来ない、いわゆる親不孝を語っていました。その話の後で、その日にもらった月給の全部を謙治郎君に差し出して「あのう、これで父親の選挙事務所の人たちにお酒でも上げるようにして下さい。きつとみんな、骨折っているでしょう」

実はこの選挙の後、照井はちよつとした事件を起こしている。或る時、農学校の職員室で照井たちが校長の畠山英一郎も交えて談話していると、畠山が政次郎には投票しなかったことを告げた。すると照井は義憤に駆られて校長の顔を殴りつけ、椅子ごと転倒させて目の下から出血させたという。驚いて教諭の白藤慈秀が止めると、照井は職員室を出て行くが、今度は屋外から石ころを拾って引き返し、あわてて白藤らが羽交い締めにして止めたという。賢治はその時、たまたま授業中であつたというが、後で騒動について聞くと、もう農学校をやめると言つて聞かなかつたらしい。白藤らは賢治に、直接関わりのないことだからとだめだめ、ようやく辞職を思いとどまらせたのだという。賢治が翌大正十五年に農学校を退職した理由は、今もはっきりとわかつていないが、その理由の一つとして、この選挙後の騒動も関連していたと言われている（森莊巳池「或る対話」『宮沢賢治の肖像』津軽書房昭和四十九年十月）。

賢治は「文語詩篇」ノート」の「30 1925」四月」の項に「照 暴力」と書き付けており、おそらくこの騒動を指すのだと思われるが、これを文語詩化することはなかつたようだ。

また、賢治の教え子である小原忠（後掲）はこんな文章を書いており、当時の花巻の様子がよくわかる。

激しい選挙戦が町を挙げて展開され、父思いの清六さんが私の家に來られて私に依頼された事がある。私は父に強く頼んだが父は言下に断わり取りつく島はなかつた。栗木（父の実家の屋号）の一族として当然のことであつたが、当時、私は父の頑固さを恨んだ。この時であつたと思うが政次郎氏も大方の予想を裏切つて初めて落選した。このことは宮沢家にとつても非常なショックな出来ごとで、その後政次郎氏は二度と町議に立たなかつた。賢治は後で私に、清六が君の所に頼みに行ったそうだが、困つたべ、と詫びられた。町議としても陰に陽に農学校や賢治の教員の仕事を助けてくれた父ではあつたが、賢治は人をけ落として争う醜い選挙を嫌悪して止まなかつたようである。

さて、森三紗（後掲）は、「賢治がもつとも多感な一〇歳の頃から三三歳まで、トップ当選を果たしたこともあつた町会議員の父が、社会の流れの変化に呑まれ落選した痛ましい体験と、選挙は懼れるべき魔物であることを啓示しているのではないだろうか」とし、「選挙という身近な題材を詩にし、それを、風刺のきいた滑稽味のある対話で表現した」とする。心底から応援する気にはなれなくても、給料の全てを選挙事務をしていた人に差し出してしまふような親思いの賢治だから、身の落選には寂しさも覚えただろう。

ただ、「何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながらにはいつてゐるので、目立つたことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて來てゐるのです」（昭和七年六月二十一日 儀府成一宛書簡）と書いていたことも忘れてはなるまい。

政次郎が選挙に敗れたのは、花巻町が花巻川口町と花巻町が合併して最初の選挙で、納税額による制限選挙が解かれて二回目にあたる町会議員選挙であつた。が、この時、岩手無産党の候補・島理三郎が六十五票で当選している。昭和三年二月の第一回普通選挙（衆議院選挙）の際、賢治が労農党の選挙運動をバックアップして、謄写版と金二十円をカンパしたことはよく知られるところだが、結局、労農党の候補であつた泉国三郎は敗れている。しかし、花巻町議選では無産党の候補者が五票の差をつけて政次郎に勝つていたのである。

大正十四年に改正されるまでは、選挙権者だけでなく、町村議会選挙の被選挙権者も、納税額によつて一級と二級が分けられており、納税額が多いと得票数が少なくても当選できたという。そうした背景から考えても、政次郎の落選は、賢治に大衆の力が増してきたという新しい時代の息吹を感じさせ、反対に父をはじめとする階級が時代遅れのものだということを露呈させた事件でもあつたはずだ。賢治は大衆の力の増大を喜びながらも、私的にはどこか寂しい気持ちではなかつたのだろうか。

大衆の時代を象徴するもう一つの側面として、花牧競馬場の開設をあげることもできよう。岩手県は、馬産地であつたことから、古くから競馬がさかんで、「明治初めまで盛岡・八幡宮、水沢・駒形神社の境内馬場（直線コース）で奉納競馬が行

われてきた」(『岩手百科事典』岩手放送 昭和六十三年十月)という。これが近代競馬に発展し、現在に至るが、大正十五年には花巻にも花牧競馬場が開設された。一周一六〇メートル、幅員二五メートルという立派な施設であったが、参加頭数も売上も低迷し、昭和十二年に廃止された。賢治がこの競馬場について、特に何か言及しているといったことはないようだが、本作品を書く上で、賢治が花巻町議選の「投票」と花牧競馬場の「優勝馬投票」(昭和二年八月制定の「地方競馬規則」による)を重ねていた可能性も考えられてよいだろう。

賢治は競馬で熱狂する人について短篇「二人の役人」で、役人たちが「競馬などで酔って顔を赤くして叫んだりしてゐ」たことを書いたが、選挙事務所の中で「酔って顔を赤く」した人々のことも、どこか冷めた目で見ていたのかもしれない。

先行研究

- 小原忠「『女性岩手』と賢治作品」(『賢治研究 8』宮沢賢治研究会 昭和四十六年八月)
- 中村稔「鑑賞」(『日本の詩歌 18 新訂版 宮沢賢治』中央公論社 昭和五十四年九月)
- 岡井隆「林館開業 選挙 ふたたび「文語詩稿」を読む(1)」(『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月)
- 栗原敦「Q & A 定稿用紙の失われた「文語詩稿 一百篇」作品」(『宮沢賢治研究 Annual 8』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)
- 森三紗「選挙」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラーノ 平成十四年七月)
- 島田隆輔 A「再編論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)
- 島田隆輔 B「再編稿の展開」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク(写稿)による過程』(未刊行) 平成二十二年六月)

Explanatory Notes on Miyazawa Kenji's *Poems in Literary Style 100* Part 1

NOBUTOKI Tetsuro

Abstract : This is the first part of the series of explanatory notes and critical comments on *Poems in Literary Style 100* written by Miyazawa Kenji in his later years. This paper covers the three poems, “Haha (Mother)”, “Iwate Kouen (Iwate Park)” and “Senkyo (Election)”.